

階展示室

ここでは、多治見とその周辺におけるタイルづくりの歴史を、タイルの製造方法や貼り方の変遷などを交えて紹介する。企画展は、本展示の向かい側にあるギャラリーで行われる。

3 階の展示では、6 世紀の陶製建材の伝来から現代に至るまでのタイル産業の発展と、地域の地理や焼物の伝統との関係を紹介している。その立役者となったのが、山内逸三（1908-1992）である。山内は、地元の陶磁器の地場産業化の原動力となり、日本における釉薬付きモザイクタイルの発明者とされている。多くの製陶者が自らの製法を秘密にしていた時代に、彼は自らの技術をオープンにシェアし、装飾性の高い大判タイルから、大量生産に適した単色の小判タイルへの移行を進めた。また、小さなタイルは応用範囲もより広く、3 階や 4 階に展示されているバスタブのような不定形のものにも使用しやすい。工業的（＝大量）に生産されたタイルはシンプルなデザインで均一だが、多様な色のタイルを組み合わせモザイクを作ることができる。

また、アンティークのハンドプレスや、農機具を改造した初期の手動施釉噴霧器、タイルによる複雑な模様を作る前に使用する「貼り板」など、タイル製造に使われたさまざまな道具も展示されている。